歩みの風

明石市立錦城中学校
第73回生　学年通信
第70号
平成30（2018）年
5月15日（火）

土曜日はオープンスクール

先週土曜日はオープンスクールでした。たくさんの方が錦城中学校に来られ、みなさんやや緊張の一日だったのではないでしょうか？私の担当のクラブでは、いつもより気合いの入った部員の練習が見られました。程良い緊張感というのは大切だなぁと改めて思いました。

昨日は真夏のような暑さでとても良い天気でしたが、日曜日は一日中すごい雨でしたね。私は朝から地域の行事にでかける予定でしたが、7時頃に延期が決定して、自宅でのんびり新聞を読んでいました。知っている人もいるかもしれませんが、日曜日はどの新聞も書評欄といって、書籍の紹介しているコーナーがあります。私はこの書評欄を見るのが、けっこう好きなんです。ふと1冊の本の紹介が気になりました。下に載せていますので、後で見てください。紹介文は『プロが書いた本は面白い。』で始まり、最後は『やはり、プロの本は面白い。』でしめくくられています。私も同感です。世の中にはいろいろなお仕事があります。私はその全てを知っているわけではありません。またお仕事の名前や、やっていることを知っていても、その本当の苦労ややり甲斐を知っているわけではありません。なので、こういう本を読むと、新しい発見の連続になります。

私はもう就職して、お仕事をしている立場ですが、みなさんはこれからお仕事に就く立場ですね。トライやるもそうなんですけど、実際に就職する前に少しでもいろいろなお仕事を知っておいてほしいなと思います。

ちなみ雨の中、本屋へ行き、早速購入しました。また、感想をご報告できればと思います。

保護者のみなさまへ

土曜日はお休みのところ、オープンスクール、学年懇談会、PTA総会、クラブ育成会総会にたくさんご参加いただき、ありがとうございました。また当時の運営とお力添えをいただき、本当にありがとうございました。ご欠席された方には担任を通して、資料等配布させていただく予定ですが、その他の方も含め、もしお手元に届いていないことがありましたら、遠慮無くご連絡ください。

学年懇談会のなかでトライやるウィークの事でご質問がございましたので、この場をお借りしまして、ご説明させていただきます。

5月16日（水）1校時に生徒へ事業所の様子について説明をします。その際、事業所の場所や行き方についても説明します。公共交通期間を利用する場合は時刻表なども提示する予定です。

5月18日（金）午後より各事業所へ生徒のみで「よろしくお願いします。」と、あいさつに行ってもらいます。図書室に集まってもらい、ここから出発し、ここに帰ってきてもらいます。午後は教科の授業はありません。行かない人や出発時間の遅い人は自習してもらいます。事業所さんの都合で別の日にあいさつに行く事業所もあります。

校区外の事業所へ行く人は徒歩か公共交通機関を利用して行ってもらいます。自転車は交通安全の面から禁止とします。公共交通機関の運賃等については、各家庭より支出してください。トライやる終了後、実際のトライやる活動時に支出した分もふくめて、中学校の方に請求してください。（請求の用紙を後日、配布します。）中学校のトライやるの予算から支出させていただきます。一度、立て替えていただくことになります。ご了承いただきますよう、お願いいたします。

尚、本年度錦城中学校がトライやるでお世話になる事業所の一覧表を裏面に載せていますので、参考にしていただければと思います。

また、何かご不明な点がございましたら、お気軽に中学校の方までお問い合わせいただければと思います。

「少年ジャンプ」黄金のキセキ　後藤広喜著　集英社　1600円

評・加藤　徹（中国文化学者　明治大教授）

プロが書いた本は面白い。達成不可能と思える目標を前に、知恵をしぼり、骨身をけずり、道なき道を切り開く。そんな仕事人の経験談は、専門分野が違っても、ヒントの宝庫だ。

本書の著者は、集英社の漫画週刊誌「少年ジャンプ」の元編集長である。同誌の創刊は1968年。著者は70年に入社し、23年6か月も同誌の編集にかかわった。当初の発行部数は10万5000部だったが、右肩あがりで増え、1994年には653万部に達した。奇跡的な軌跡だが、栄光の舞台裏は生々しかった。失敗や苦悩はつきなかった。編集者と漫画家の葛藤もあった。そんな歩みを、著者は包み隠さず説き明かす。早期の連載作品「ハレンチ学園」「男一匹ガキ大将」から、黄金期の「DRAGON BALL」「聖闘士星矢」「SLAM DUNK」まで、ヒット作の裏には、秘訣や名人芸よりも、血のにじむような努力があった。



◇ごとう・ひろき＝1945年生まれ。70年集英社入社。「週刊少年ジャンプ」編集長、同社取締役などを歴任。

653万部の舞台裏

「少年ジャンプの編集者は、読者である子どもをなめなかった。毎週、徹底した読者アンケートを行い、読者像を把握した。「友情」「努力」「勝利」という有名な編集方針の三本柱も、漫画作りのノウハウとして考案したものではない。調査で得た読者像そのものだった。人気アンケートの調査結果を見て、連載を非情に打ち切ることも多々あった。

著者は過去をふりかえり、謙虚に語る。

「我々編集者は、簡単に新人漫画家の育成というが、むしろ新人漫画家の才能と創作エネルギーによって、漫画編集者として育てられたとも言えるのだ」「時代の変遷とは恐ろしいものだ。変化は足音も立てずに忍び寄り、気づいた時には、時代は別の顔をみせる。編集者の戦いとは、読者の想像力との戦い。そして時代との戦いであるかも知れない」

筆者は大学の研究者だが、本書を読み、われわれ研究者も学生によって育てられ、時代と戦うことに気づいた。やはり、プロの本は面白い。